隨城家書人抄

下

へ 5
2250
6

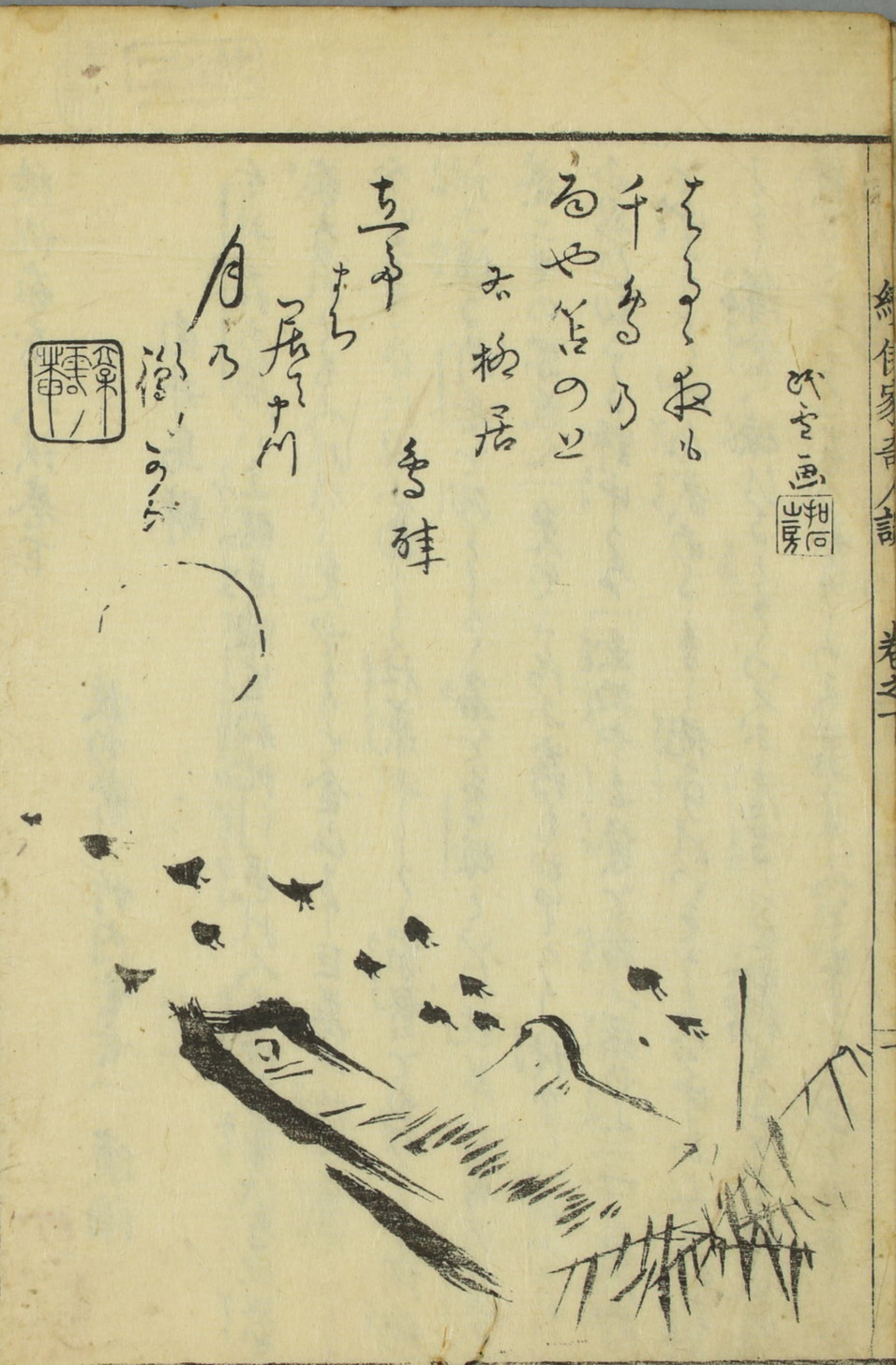
へ利占
帖 2.250
巻 6上

續俳家奇人談卷下

故白嵩 竹内玄一 遺編

白井鳥酔

白井鳥酔ハ上総国姉崎邑ノ人ナリ。世ニ聞エタル豪家ナレドモ人ノ見ルヲ免ルヲ恥トシテ金山千巨萬ノ財ヲ費シ、ヤハラカニ人ニ思フ物ヲ仕業ヲ家督トシテ世ノ俗ニ逆フ。ソノ故ニ世ノ人ハ鳥酔ヲ牧羊ニ喩ヘ松翁菴二世ノ宗匠ト「免ルヲ恥ル」ト嘲リシ。「ゆふぐれ」ノ句ハ切ル野中ノ「玉柳」ヤ「白髪」ヲ拾フ落ノ一ツ家ハ何ト中ノ「時雨」ハ「ハ」ヲ「ハ」ヲ「ハ」ヲ



去むるか最門の娼家より雪庵と名のれる湯立客れ七日居續けしとき〻たぐちふりく呼出し若用ありとまねくたく仕方ひ〻帰尾張さそつ人古時爲時等打よういふ心の移〻せられ〻日光の元賀より俳合ひとせ共間なる我りと粧里にゆける八幡ひととびも不訳をる時公にいふうり無る乗じ〻居つゞけ〻うり拉るふ無尽〻る打うるまは〻と幸ひ帰り来れまと平伏して答〻るもとう

山口素路

山口家欲江戸の人素路名人といひ決麿屋と号し老て酒巻小居一瓢とうと呂れまとし古俳を通し〻く云く禍莫大於不知足福莫大於知足と若うしよう第ものをめで〻一流の宗匠と〻こいふ又双六の妙手〻く老に人まむひて双六の猜員ち〻

いづれの手ようせバおそく固けんと打笛〜かるゝ〜ば猪ゝと
打べうゝびとゝくゝを蒙くといつべゝ或ゝ猿丸あゝ
た緑町なる庵のほらふ「我いたゞ琴ハ心とゞのひゝれ家
と其琴を弾ゝ楽ゝとせゝそ又素藝なる俳諧伯父素堂
子にまるのびゝ〜風流〜既なる沙の殺せゝ時「猿曳ふはなる迷ゝ
猿の秋意うゝ子ゝ吟せゝもあるれゝ氏老八十二業にゝ世我
去るふいゝ箱戸ゞ逼悼集れ中ふゝ〜宝暦の季夏晩日乃
夜未兆秋ゝ折びて「故ふ二人合れて交ゝゝみゝう「ゝそ出
筆も茄子幽けゆくゝと附ゝも今ハむゝゝと狐ゝうゝゝご紀
しゝゝ又生ゝ交どられ白ごゝとあげゝう「藪入や積るゝゝひ
とねえん紙釈ゝ吟「柿ゝ六ッ藝ゝゝゝあり十三夜治徳「耳
掻に考稼ゞゝる花卯木白雲「山寺の優ゝ出てる暑ゝる

殖林「亭主ハ夜ゝゝゝ治て時ゝ百里「松高や燭若の奴
風ゝる敬雨「ゆゝられて松の吾きゝあつさ水冰花「蒙れ
蓼ハ大きゝゝゝ梅の花祇徳「梅咲や三所ゝゝゝゝゝゝ物
治洲「花に杖ゝゝ果ゝゝ才も撓むまで素来「月雪ゝ跡
での事ゝ花ざゝゝ紀逸「麻れ和のゝぐゝぬのハまぐあと
乙由「たゞゝを引ゝむゝれ月見ゝる宗瑞「出干や黄ふ時義
ゝ多ゝ合る光「猿の地犬狗出ゝとゝゝ水焼亭「けゝゝゝや
日ハ焼けを捨ゝゆゝ柳居「何出の面新ゝゝむ枯ゝゝゝ
米仲「大和路の稚ゝゝゝゝ花ざゝゝ浦ゝ「彩月や海我
ゝゝゝ一束琴風「置ほどふ横ゝも廣ゝ竜花東素儀
「咲ゝゝ夜ゝゝ我ゝゝ出の夫治涼「甚云湖も月の数ゝ
元ハゝて貞佐「熊坂ゝ出力あゝる新夜ゝる老鼠「紙雛我

男が立ち出でぬ右ぞうり　鉢波「かすひけり猫も八十八夜を」「茶会の義右衛門が裏の花世うゐ山二句作出おやえ拾ひ」湖の云ひし

てハとう〳〵かれ〳〵と記したる時年ゆうてれ名家多うるも

俗こと蛍なるうれ

紫子春来

紫子春来ハ江戸の人六盤仙と号ス「正月ゲ来さう畑ゴ下結

の紅田家ハ元日見るがおもし〳〵」「名月や花なき里ゝ夕比丘尼

あれ古今ハ春うゐと立て見ゆるとハ家より出て秋の心花にし

なし〳〵るぞ働きなる自らの今花の一字を三春さ〳〵ゝみて

漫りに正義とゆるハいと無なし〳〵と格別の云紫子〳〵ばや

米仲ゝ紀年ゆふ春来ハ俳ゆふ臺昭女の俳成掛物ゝてゝけ

るゲ或時賛し〳〵「我意ハ釈迦や達磨を仕へゝて其ゆゝ記

ふ意よりもゲる又ゆと日我尾に来て花見ゝと出し〳〵る初出

に記ゝ田金ふ俗ゝ記ゝ山風ゝ記ゝ萩ゝ記ゝ萩ゝ記ゝ伏

ゝるがいつの間ふ花ふ袖ふ出ゝ記ゝ蓮ゝ記ゝ蓮ゝ記ゝ蓮

案之何が年く歳く花相似歳く年く人不同とのくる句句成感
しく桃祇の変易を思ひ終に花集武玉河十六編を著して人の笑ひを求む後ふ友我賞明者
なるらん乞とおりひ続ぐ今江戸風流と称せるハ此の人を始め
其檀墨こしたれば一時流行しく祇をえて遂ハ又ふろ
ふく変し祇るに盈れを虧るれ易祇を知えるるやまづし
きよりあるり為を為りしとなれや時に秘書監風谷先生
その風流と称せるの句あり稜く逸氣好風流閑座清吟能
解憂水雲月嶺幽栖意四時常作菴中遊とまた客来ふ不
俳家祇滝

祇滝ハ江戸の人祇空にまるびて自立菴と号ひ常に俳諧ふ癖
しく日発句をなすとなり「死さうな人むとうふ」花の山
一夜更その日れ出るまうんべし或時鼎佑ふ文編かづりく鬻
瘵をまふうこに贅をあのもれて「ふ月ふのふ」花祇ぞ
流華のかく為る児清庭紙ぐ夏の雪かりく小雪れ遊
如ふ牙を投うも其居ぢけふ帰宅の於紙共ひるるにうびく
むうひを恵んとのくびもをのくふ祇ふの母を海ふ想ふく
歌くまく為ふ祇滝仮ちそれ
一句をそくうう「弟ふやあるうふ歩ぐ出がれ梅ふれ児清庭
の息俳名多舌兵庫庭拙如紅梅ふれ彼ふ者ふ一句を
ふと剛へ古来かうひうやうけるとぞ又別荘を実疑宗と名く
或日合歓老人沾滝ふ来りく「こしぐやかけ沈くを庭乃却
本地と沾洲ふ雲風紫ふるも生ふ長無ふりく」と祇滝ふ

つるかいつつく百年以前の白今時の調よりもゞ今れ調ゆゞ百年の後ふ合ものと見時世の変革を知れつるべし

西鶴妻

西鶴ハ江戸浅草ふ居りし俳諧人みゝ丈婦ふも俳社をしゝ色う或夜いゝ言ふしふ西鶴ゆるものこの俳道ふ調市を使しゝ出ゆんとし妻ゝ申ゝて出ものゝ「我子ふ為ゝ使ゝ風流の言と風流ふ西鶴その心よ知ゝ人ゆきしゝ見ふ似ゝる夏ゝそゆれ冠里その「寄れ日やおれも人乃子揚ゆりひと候伯すゝ出家ゆるも示寄ゝ」ゆや

皐月平砂

皐月平砂ハ江戸の人貞佐がつるゝ其ふ和歌ふ人ゝその乃前棘とふふ寄ゝ頗る和漢の出平海

わり或ゝ紀句のゝ出ふ清國の先帝封禅れ文ふ日月燈江海油風雷鼓板天地第一番戯場尭舜且文武未莽操中浄古今来許多脚色ゝ大紀号ゝ「月雪や蘇の疫ゝ八月年天竺の評判河赤西ゝ」ゝ

椹がゝ月ゝ「かゝれゝ世ゝ」ゝ「ふ金の亜ゝ」ゝ「ふちゝや花れ皮ゝ」ゝ

集いまゝ剃ゝ今の平砂ゝ

中村敦石

武州埼玉郡谷原村の里正中村ゝ敦石ハ駿河の国式部少輔茂原一氏ゝ世の孫ゝ少うゝ国流の道ふ知ゝ拙しゝ

けゝ先連歌ゝ好ゝ時亨其河ふゝ交り後俳社平加ゝ

宝暦六丙子年盂蘭盆會供 三十有六句

句盆供

宿様くして [illegible] 三界の [illegible]

迎火の追焚するや 道男

平砂

燈籠 [illegible]

墨 [illegible]

[illegible] 枝

[illegible]

凡三十六句

[illegible]

盂棚乃蓮の [illegible] 風や

[illegible] の表々

打掛 四阿 [illegible]

燈明 心切の利鋏子 照せ法の月

供物 [illegible]

挽茶 [illegible]

牛

杉麻灵 針売棚 実毛也 乃朽假 生木耶 天桜酉 か物

汲水 人の身に [illegible]

焼香 五種 [illegible] 机 掛

盆中

[illegible]

葛之葉乃裏

毛問波

也箱位牌

馬 霊祭

飯菜 [illegible]

供物 [illegible]

摘華 [illegible]

世霊表 比万古 南豆末 志里結 灵日 祭

棚経 [illegible]

市 [illegible]

[illegible]

燈籠 [illegible]

部類眷屬 [illegible]

僕喜八世 [illegible]

無縁方霊 霊棚や海のむこうは額上人

漂ふ足を帆にせよ施餓鬼幡

送火 おくり火や一人ハ立て灯籠 拈

橘門百蕃と称し雅号を敦厚といひ庵を南窗山房といふ
一山葵ひ谷ちくさる壺解うる「太の房」とあるハに表のも
うぢ「絨谷宮山」とかいふ拾遺集に人の校雙紙
色こいふ〳〵せ江戸に出るのち洞竹庵を結ぶ平宮山上
有る清〳〵父兄のごとく人接びたしく〳〵いく世人書物を
りうし来る〳〵先生をうやまふ志の老文ばかりなるゆゑに
いうで侍りてなるゝむ宮山翰〳〵人書物をりうし
来るハ拾ふまるべんがうめくられハ我智の不足を補ふ恵人なり
教ハ学んハのうべうしとつ人口を学てを良〳〵をのつハ不織物
或問金花石蒙集俳諧原道をどいはざ世ふ行れざれハ新
巻すゝをしひうか天ぬ八年七月物反ハ辞世「数ならぬ松
や歳とせ冬緑

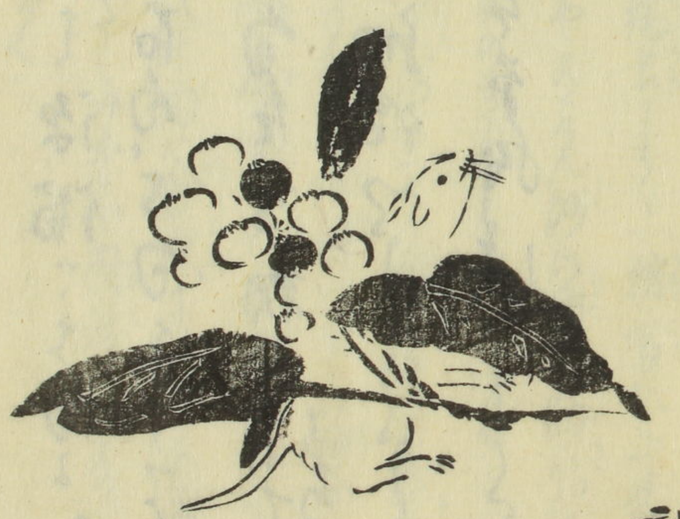
絨谷吾山

法橋吾山ハ武の絨谷の人ゆうしう江戸ふ来り柳居子
たよりゝ俳諧を学ぶ洞死てよりのち古調ふ立られ
て蕉風の旨とえうう号を洞市と号るも竹の虫なるとめるる
ゆうも其人ゝをもりべし一年れ巣貝ふ「出るぬれ線乃
萬代之逆旅日月萬代之過客とゝるふなれを菊斗ふ
飲中八仙の句〳〵を色たゝくるれ御ゝ春章を「鼓壺
のわりうさまひや苦清ふ汝陽王を「日れ乃や延もあつ紀車
うし左相を「千金の氷室やせ先て吉れ味宗之を「岩夫と我
拾ゝわのはちひうる蘇黄代「妙言拂ふ蠅もはらひ蚊もさゝ
ひ李白を「いゝゝに糸をもうせて帝張旭を「夕色や筆

とかるひし〜雲れ色焦遥城「市中乃人とかるとや憐の蚊
始兎角郷しく笑流の國福晴の罪とあゆるに何なるの
でしなの秋人の易ねふ俳諧なるまより答ふさらしば一極城
徊しく通るべしとふ折うう時多るのなけば「我とそをゆる
さぬ罪やおとぎに晩多俳徊来営と英し蕉翁の和と解
しく先輩の来疲とあうに又法方云物乾林呼あに為ふ答
八皆人れのそのそぶ恥く垂城辞に成る吟「花とうん〜雲八きのふ
で本の秋

五竹坊

五竹坊琴左八尾州の人俳名と尾元坊より伝ひう流風をうく
一時小唱る帰来仙と号に「四ひおの弁お奥ゆり鏡月「仰向く
分別八ものしくふの月或時彼小秋ひう我年稀をゆり彼ゴ



[illegible]

[illegible]

[illegible]

玄武坊とゝふ芝統ハ尾元坊より鍋尾朴斎ふ伝ふり朴斎より
伝へ〻〻ゝ坊ふ〻る「ちゝ〻ゝ来〻〻〻

ちがうとをうけせげりしも尚時ふかいくの大導ゆうをと嘆きぬのもあらし

洗門曉菴

曉菴ハ尾州公の藩士にけるの俳仙を英流の仏某みちるびしもやく蕉風の旨を感ぜしくに一風を起し拘うら花の本の寄をと拘せんと思ひ立しゝ勤の得ることなくて君の動静を窺ひ流人しゝたり程なくして免あるくに及られ住居を許ひ史たり名古屋の町ふ移りく蕉面巷と号し周舉も親つとも称せも「振袖の大和ハ去くに日の初め「咲やれて有こけ学の四月ハ「本の春末の寿やを花木堂「咲や稼のの中る新の流老ふ番んをひるひつ戸を稼しく曰方れ清地ふ於ふ寶暦中うちのくふ猿ゝ松尚を一見して「陸奥殿の涼意し千松尚とせゝが其俳いまゞ俳境ふ入ゝとを死の稚客にし

と合るも此和中ふくびゆく「松尚や果ハうすゝ夕なるの

仏れのうゝふや老く光ゝ子ゝが迷殿下ふ石れ参殿ハうふ

ゝ「あまゝふ星の点糸ゝたゝふるその名やゝこ新

ふきこふ自ら拾ふこひる数尚「書狩ふ山路のなまるれる事

「蛍と長ふ去ゝろや庵の古壁まで「頓狂の太ふうまれる狂叩

谷口蕪村

谷口蕪村ハ別姓與謝名ハ長庚字ハ春星ニ果東成と号ハ常

仁和澤の出ふ眺く稗史ふ説までも海ふびくふ支ふ一を人

と成り弱義すゝ物ふ物ふびる時ゝ一光学仏義をとりて公業ふ

交るとゝくども礼法を正ひるのとなくびゝ已が産業ハ漁猟を支

ゝく水屋ふ家居ふ妻子ふやゝ古ふ孫子ふ時ハ出ゝ網うらふ砂どり捨ひ去ゝ初の市に出ゝ帰酒を買ひ出みゝ炉ふ入ふ「三椀の新蕎麦ゆゑ長者振風姿卓然「妻の酒ねのひのたゝうゝる悠ゝ無渡「花ふ疎ゝ帰るさ悪ゝ衣拾ふ酒落自在「雑掬をまれゝと樹下に赤ゝる生生清涼「さゝ雨ふ冠ふ冠士の裾翌の小家より磐言喩無比「さゝ雨る去ゝと漱ふきむ寄ばゝ販西上人更得其類「緑蕎市ふ力とをしるゝ「年守や乾燥れ古力稽の猪共意氣揚ゝ偏和其成人自然に好む而の滑稽その乗花をえる千載の下まで其人をゝこゝふべゝ又画居士謝寅ふふ初め漢画ふ学ぶ後ふ一風と紀ふ世の人の初る而その初ひしたふ尚時大雅堂と伯仲ふゝ

や平安の洪園先生頭謝蕪村江村之図の初のゝ

ふら迷ゝう云ある若ハ求めんゝその人の生来を知べし

蘭更居士

蘭更居士ハ醫を業ゝゝ京初ふふ先り芭を加賀れ節因ゝ

海をひて初かゝ俳席をも立けるゝ時ふ尚ゝ蕪村暁窓ふ

どれ名家ふけふれむゝゝ年月をふる或ゝ加賀の何

某きゝうて今暁の句旅ふ殺しゝ近ふ俳社の稼梁

なゝ汝居流ゝゝ時のいれるを初ゝ俳やと有ふ業花城

庭下ふ投中ゝう家史大ひふ筆を公俳のふうゝむける

ゝう初鄙ふ流れる紀字海ゝハ旅ゝ「ひうげや煙りれ中ゝ

梅の花「日の新とおもゝ孤むる蕉扇や「枯の一の月ふゝ

とれゝ流迷ゝうむゝせ東玉行御の途中伝法の玉ふの新なる

残座伝の素首良ゝ浜ゝ幹ふ旅宿れ初ゝうゝるゝふもて初伝へゝ古

出函を見るに中に蕉翁自筆の奥付細選成るべし諸國の門人多くは中に蕉の少枝が句あるを見て人の居ぬるを乗じ小袖の筆にて出載せる翌朝早く後あるべの見附より大ひにおどろき丈より私先垂てみるに人すんせばもとの

渡邊伝者

渡辺源右衛門八尾陽の藩士にして代々義侠の孫にもあり常に孔雀を好く装束等に合はいやしく奥しく拵えを為し俳諧を嗜み居く晏如たるハ彼楊雄が操をもれるものべし俳諧を曉窓が門に入りて老翁と号し「梅ちりて花の色出るある」の句「時雨又降るそのの秋ハ長し」「宋祇雪の座坂の枝に降れ」「本枯のうへに地に降るうぶ」「野ふし俳道と投ずる酒肴」と拾ひ出る代々しく已が庭中の土成蕎麦麻丈六人の集めて泥土をそこらび出し時に俳客あまた席に隙なく山を見るあり迷に出く今日の俳道何の風情も色庭おの晩はくりく客人の奥に使くねと誠しやうに西しれくり又の自俳社れ点しく宗物を出さむしひるに拾ひ不図ひ出く已が釈よりは代くるる元山やうを出し点侍しくるくせんくるく文句を乗しも年くれ拾へに古屋りはく蕎麦とはるに異なるく與人とすれに蕎に若ものとりてそのまくるでいとをくき

井上士朗

井上士朗尾州名古屋彩町に住ひ素より物に拘らざれども学実なるハ其性に学うやしく医術を励みて敬勢ひを拾うり毎朝とく起くつ人は調合ひを已ハ別席に出て

りゐて病人と扱ふ打うち弦歌の稽古つゝひ来るゝ燒焼やむ
時なきも其機とし為ふ日あり〜とうや人の及ばざる所なり
和〜せ如の小庭小菅八重咲来りゝと庭掃のとのこの若葉ふ
「美者紙りこ仕る梅ふ垣ゆゝ伊勢の年居宝出の花乃
漂朴なりとめで〜文出の雄来ゝえんぜるも或とゝれ泉生に来り
拾びく〜を清ごりふ冴ゝるを「松坂のまつらを表乃こ
まりなれ出る年家ゝゝゝ松ゝ「琵琶とゝて
右〜むと月の色大和の国行御出ゝ敵火山ハいづま耳梨
ひゝとゝれぞと行るゆり〜泥の来あるゝに雄丈丸立るを呼ゝけ
さのゝ〜初ゝゝゝむゝゝ匂三ゝとゝ〜ゝとけど少こゝむる
花色もなゝれば「出人も耳ゝ〜山よ歳紫撥花月一度の拾び
かゝふれ日も既ゝゝれて多もけや一瓢の酒の残りびく〜なく

旅ゝれば〜花出〜〜「瓢箪ぐ〜糊おゝゝ多ゝれ平生紅
拾ゝゝ〜人年自賛の句「南窓月夜南窓時面白辛崎
の年ゝや病に卧〜〜「見る事と初迷や田隈の流俳居られ
絶頂ゝ旅ゝゝ初免俳青ゲ図像を待〜〜紀蓼乃宴城
りよゝと寓たゝふ拾〜ゝゝふ席上庭中ふゝ仕〜出紀紀
蓼をちして呉ふ弾を忘けるゲ出〜〜ゝ〜容ふむゝひく句
なくんば人ゝ事なふれ士朝法とゝ入〜答〜云〜「一字ッ〜変句
出だや萩りゝちつ人蕉面ふ八巣の号を待る文ふ霞の松ふ巣ひ
蓼の梅ゝ巣ふとゝふ〜月の色ゝふ書の衣ふ巣ふ日も若ゝ風雅
と庵〜ゝふ時ぞゝゝ蓮や鳴の浮巣によせくる花ゝみゝこの巣の
力巣ゝと狂句れ巣守と垂ゆゝねゝくその云紫海ゝ無ゝり

門上不白

川上不白本姓八巻氏ハ先祖より紀の彩宮侯ハ代々
已十六葉の末裔なり家譜ハ遠き千ノ如ク富ハ能く茶ヲ好ミ
なび宗雪と初号し日夜の孫麿ハその頃過奥ものし
狩能ハ代迄ハ家の風流ハ若ハ海ノ中あるべきハ
いでや身を立ん為と揚ゝ上ハ江戸ノ住来し熱雲蓮花の
て帰るや東人と義せしうゝふ出ゝ江戸ノ住来し熱雲蓮花の
二菴といとゝてようを化法今ハ剃ゝ法ハ僧ゞ
功文ハとりて拙りとハ不義菴不白とゝ号も陰羽居士ゞ唐物よ
り取て来れるぞ又古を学ぶの風流ハ或ハ孤峰宮中ゝ斎
田松斎ハ何れ能号あり時の帝羅白殿日光泉居宮ゝも居ゞ
されゝ茶ヲ宮をられしぞ居参なゝふ之の大智識大川
茶輝参学龍門茶仏大顔禁と友とゝよゝ之ハ茶孫ハ乃

湛江和尚本方寺の貫達上人ハ出入家指深長正玄利欣
ゞ茶ハ代ゝも史ゝ又拙能を好ゝ茶ハ沼洲ハ之ゝ中沈
殊勝なるゆゑ老ゝ夢者ゝ之ゝ茶ハ之ゝ茶ハ
力ゝ之る一事宗雪と翁ハ宗雪ハ茶ハ
ゝ之ハ代の表日ゝ菴宗雪茶ノ湯ハ合ゝ立ゝ時ハ
陰ゝ之ゝ「陰ゝ居れ」ゝも茶湯の花ゝ振ゝ夢ゝ
そびゝ之ゝ茶の花ハ茶ゝ居ゝ花の咲き日の花ゞ
うゝ之ゝ「いつゝ咲いでや」ゝ「ゝ咲ゝ」ゝ
ん多ゝ摘ゝ之ゝ之ゝ眠ゝ茶ゝ警の二ゝ
ひ又その字ハ疾迅ゝ「雲ゝ」ゝ
ゝ之ゝ日ゝ之ゝ茶ゝ
いろゝ之ゝ茶ゝ祖居士ゝ葬の茶湯ゝ

それハ唯一縛の天下れるもとゆえ
ん人ぐをうと問ひて「松風ふけ
ばくや菊の花ぶれ茶煙吸宗
遠出生の松千家の業ん嫁子業りと
雪の松のをとあるの清流あるの
流るの

寺町百菴

寺町三条ハ江戸れ人新柳宗匠
を山ちゝ「小面の侍風変窓れ物」「十六夜に出
月うを十三夜白氏文集ま聽我歌」「心を寒
貧家女難嫁嫁晩孝於姑と泥を引くく」「初夏ふうゝぐ
徂徠先生　大樹公江戸の時紀州
いひ夜その孫屋ふ仏ゝくくも侍と一家の風流ゆり壮茶宦
遠ふ生ゝ江ハ教侍道統翁と交り拙く和ふと嗜ゝ寛保

元年の冬伊ゆゆゆ

しも茅舎ぶ後の行方もしらず

馬場存義

馬場存義ハ甲州武田家の末裔英法寺の末孫なり後ハ
りく三浦家に仕へ[illegible]おのれ剃髪して春室春来と称ス隆徳しく春室と号ス
湖通の弟と称る時ハ年罪春室春来ハ石
しも沖の老翁と改名せり[illegible]おのれも存義と号れり初めハ
号雪井菴より古来菴と名るゞ世に[illegible]の古来と
号を懷ひ[illegible]ゆ[illegible]有て尾こゝ[illegible]「烏帽子きて馬鹿
清ゝやゝ松曳」「紫ぐれの月日の月や梅のうち」「けさ秋と和ら
で庭さく男うゑ」「田布施布みの隠れ家れ[illegible]」
うゑや菅場町ハ住る時ハ松[illegible]家ゆゞ[illegible]なれば[illegible]ふる
おゝ[illegible]傘さゝて俳[illegible]ゝ[illegible]れと宗匠の夜面して八景の句

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]も[illegible]ゝ年ゝ[illegible]ゝ左内町ハ居住物
ゝる後ハ[illegible]る富ゝ老と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
りゝ時ゝ[illegible]儒成南郭先生に学びしを主人の上ハ立人ゝ
あゝハ[illegible]ゝと爰ハ[illegible]ゝ俳客ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ成[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

藍田西　[illegible]

坊隆

義烈と存義を抜群に発し、忠孝を出さうと丹誠を
抽ぐ俳の奇境に入しとも

春秋菴白雄

白雄は江戸馬喰町の通菴を場のあるうりこ伝州松代の藩
より出し人と少深く性氏を匿して偶たまゝ問ふ人あらいとも
さて微笑しゝ更かゝるのなりしとぞ初め松窓尾烏明の
門に入て芙蓉尾眺烏とゝ号する烏明の俳諧の一脈を受て
なを遍ざしるゝ一とせ忍ぶ志を翻して家を雖伏せ事れて
づくなると悔く松窓尾と長去し一家を立るか冬の日集の序
調と仰く吉と猟と宮の先名を白雄とあらむ或ハ志雄坊
も称そう尤も韵卓労く迷ハ孔笛の附録ふ氏の老哲と
学く活する因ふ日志雄ハ風を威ふ兵薬と倚ふ

人を和するの玄滅あ〳〵云く世にあれるうれども天つふ許多の
英士を出せるゝ世ふ知る所なれを流ち人和ふ〳〵もいふ尾うゝ
又彩烈ふ雅琴と宿ふ一書ゝ出るより蕉門の瑜は自己の
一見識を出加ふ云志とゝ人ふ見る物と尤世書のゝ八彼芭雅
破ふかよ人ゝ多くいとも見非の褒貶ハ姑く問くべし活ぶう
の貞流の選なる所傘とさく松下ふ数百ヶ条の異見を徳く
雅所傘とあらハ志ふ叛ふゝ雅ふ清潔なる一格を天明の
比むゝ豊に甘谷ふ人を雪中庵の門人ゝ加ふ如くたゝ
好める人ゝ白雅坊も打く止宿ふ風雅を加ふ事ふ
親ふ加ふ云ふ人の交甘谷字ふ逗留の日雅後の縮の
人来ゝ云ふの彩識なと云ちふ人ゝ探ゝのふを中に家坊の
因にもゝ云ふ物ゝ加ふ甘谷を云を識て見ち

老坊ふかるるすべしとてやがて裁めふ若ふ命じて仕立上るを客坊歓びもくさう自ら打ぶくとりかくて扶ぶ甘谷うのふ茶試うまとふ扶ぶうまく風雅の曙ともなりたりふ迷いて切ふたく交の孫の茶秋とおしねとおりて我とても亦盟の日を祝すべうしび寄を人の厚志とりて我ふ寄をまるる一衣うあれを堅くあるうんて我仏と慕るふいうぐう風雅の日ともうんやうて称る外ふ寄をて文ふ扶ぶるなうう甘谷も庸人なるう掃だいうふも我あやまるくやまぐ生一衣ぶらるをみく海原ぶもて生ぶ宮ふ住を変るとも又衣都一織の衍もなうて蒙尽嫌るるの屋へ門人二三ふんと合ぶくぶ易を助んとて三国の美金を指るふを後日も逼るく書湯を求ふる役まうて別の人く来りて嫁排のよかくの相ようたること歳る物ふ立るくみるふ先ふ指まるこ和の変も寄るくるを

しを呼ぶとふ坊ぐ白を一尺のうう秋化へ切るのみうしぐ懐ふせんも累をしを傳ぶんも盗人のおそれるく人の乞付まじき出棚のかくして出ぶうしう先うう先て拝び四方へく帰られ偽しぶるを忘果くふも出さりしまるふ再び揚を沒るるうかうして鈔ぐ人くも扑て大きに笑へるとぐを酒蔵かくくのかうう寛政三辛亥歳九月十三日没享年六十三名門海晏寺ふ墓ふを建冷を拾ふまを門まして「関の戸やあるき彼岸あきの風実墓墓を拝ぶのうう沼ぶくしとの白髪首七星ぐ立まふて「半の斧ふ酒ありかざく花も桃孤高の人猟月二十七日江和を立るう我を寄をこの志ちて切うも又あふうもう俳人その風教亦一生あるりのまをかりる

大島蓼太

大島陽喬俳名八蓼太と云空靡居士と称し雪中庵三世の宗匠なり爰に二世吏登沙の俳燈を翻さんと苟も乱調をくぐさんもとより後を尚州より門人数多ありて杖を曳八牽に齊縁ありて原の白張稲沙の璧尾下に丹田を炼る事多年積て遂に宝暦巳卯の冬免許を書かれ大島雪中破却両重関所謂隻手與音聲也云云又安永乙未歳陽門人蓼太の俳号の一句を乞て来船の清人に示し宮澤士に乞て

それと漢さとり大に信ずに非とも書しを一帛を贈る

一章かれ

撒蜜他列耶阿兒要披促華尼麼子那吹吉蓼太

蓼太先生者隠君子也都人士以為金馬侍從之流亞矣中畧

蓋僕亦有所感也因賦一絶寫其意倣顰之誚所不辞也

長夏草堂寂。連宵聽雨眠。何時懸月色。松影落庭前。

乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程敏南□□

又安永丁酉文蓼太句集を予刻せ序の俳去有歌子曰東都蓼太以善俳諧歌聞于世中畧有是哉昔者晁卿與唐人酬和明人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋未知有連歌也而況俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始云云

思ふ人の和韵ふあつるの八嶽ふ風雅のめぐみとそ

しべ々迷又有歌子の言のめぐ俳諧ふ八兒よりしを彼ふと國人

も去るとすると八一家の名譽俳の世上あるべきやふ扨ふこありし

昔の芭蕉庵の跡とふ八今八俳の侯の邸内ふ移るれ八時とその

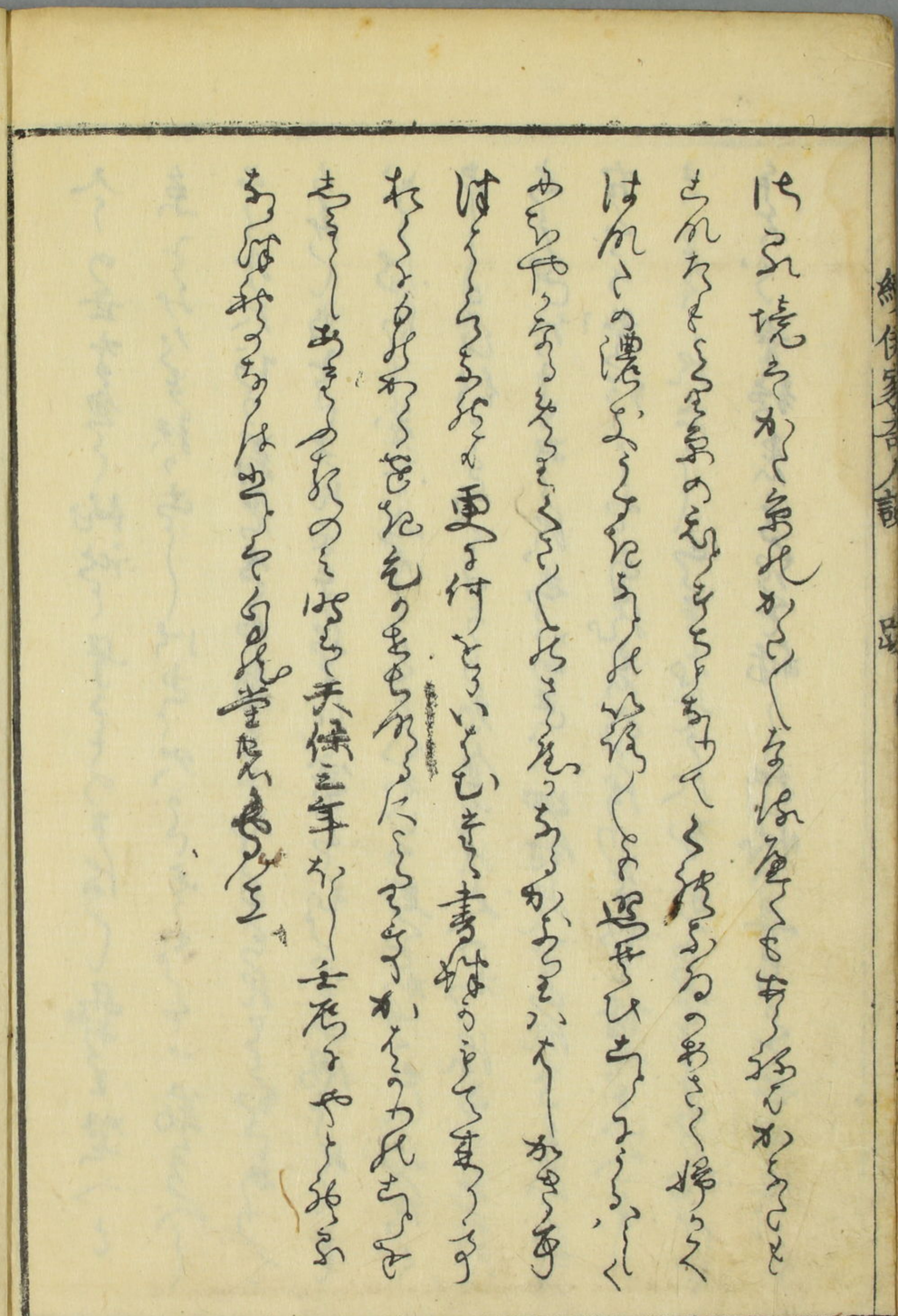
四季のあらうと蓼ふ人をとい共も奎く隙を見るふかけ

力おとぞん寂ふ於て明和八辛卯歳田舎の地を去る事一二町だゝ
りかすゝ蓼太の善提所要津禅寺の地中か古池のかゝら残
うつ〳〵小堂ゝ八祖翁の木像を安置〳〵傍ゝ一茅庵と結ひ
乃芭蕉庵と呼ふ又同浄刹の内かくつきと営ゝ蕉翁の像と瘞
て俳塚と唱ふ抑此要津法窟八蓋昔俳頂禅師旦懸杖の因ゝ
ゝ〳〵幸を志のぶ縁なきこゝ有ゝ〳〵れたゝかゝて後元禄の世の
ゝことだうも今深川の庵ゝ於れるの実手古きゝと懐ふま縁を
夢ゝし道と学ぶゝ迷ゝと警るの仮とまるのいさゝか年でゝ翁
者の所家のおゝぶ所なるべきや蓼太生涯の編集六十餘部事
夢ふゝ〳〵ゝ〳〵ゝ八者〳〵又世ゝ於る所の日時冷体面ゝ〳〵ゝ八たゞ
二三と拾ふゝ化の例ゝなゝふのゝ「名月や義ゝ〳〵ゝ花のよ
の山「迷て八月ゝかゝゝ有ゝ「名月やゝゝれかゝゝ八

蓼の私「ゝゝ〳〵ゝと人迷て風ゝよるの雪自像ゝ歌〳〵
て「ゝゝ〳〵ひの人迷りのゝ〳〵たゝふゝ庵天明七丁未之
月七日歿年七十要津禅寺俳塚の傍ゝ墓碑諸あり

蓼源

續俳家奇人談巻下　終



前北齋爲一西狂老人畫圖

新編繪本漢楚軍談

全部四十卷 近刻

世通俗の書わとるも量家 租公讀安うべ特の金思
通上かく故に這同ら書を素めて訳よ公ぶ一紙子を要を
却て出家もまく如えて六世り清ら神まの書増ら部下に詩に
勢ら三紙目帰わ故小新編漢楚軍談とり且更学いあ合君ら八
摩若ふおく自ら四手ホ下ら公ら書なれば偏ふ高覧を乞ふ

蓬廬青々山人著

俳家奇人談 前後六卷 出来

蕙齋紹眞臨圖

宗祇貞徳 秉ら号の性青すり言葉今ら乱ら道に名わる
りの哉ら十八ら中小も後世に一紙の祖と作ら人にいふも
更ら百流接載業ら異ら乱ら乱あらく掲出しく
し傳ら利益因一世の名誉でも繁すらぐ書載く好古
相雅の堅ら伝ふ凡そ開巻に志すれ志ら書ら
一ら人関ら先師の行川清を目前ふ板ら
ぐら

天保十二辛丑孟春新刻

書林

大阪心齋橋通博勞町 河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛